

【研究ノート】

和暦の西暦表示についての提言

近 松 鴻 二*

目 次

はじめに

1. 太陽暦と太陰暦と太陰太陽暦
2. 太陰太陽暦
3. 旧暦の不合理性（不規則性）の検証
4. ズレの検証
5. 和暦の西暦表示についての提言

おわりに

キーワード 太陽暦 太陰暦 太陰太陽暦 旧暦 和暦 西暦

はじめに

用語の規定

本稿で使用する「和暦」は、日本史の諸事項の年月日を元号・年次と、明治5年12月2日（1872.12.31）¹⁾まで用いられていた太陰太陽暦の月・日で表したものを指す。

「西暦」は、イエス・キリストの誕生を紀元とする年次と、BC45年1月1日から1582年10月4日（天正10年9月18日）²⁾までは太陽暦の一種ユリウス暦、1582年10月15日（天正10年9月19日）以降は、ローマ教皇グレゴリウス13世によって施行された現行のグレゴリオ暦の月・日³⁾が示されたものとする。

現行の和暦の西暦表示

わが国の古文書・古記録や歴史叙述の年月日表示には、元号・年次とその時代に使用されていた「暦（こよみ）」による月・日⁴⁾が使用されている。わが国の元号は、明治元年9月8日（1868.10.23）の明治改元の際に一世一元制が採用されるまで、天皇の代始や、讖緯説に基づく甲子・辛酉年、戦乱、祥瑞、災異などにより頻繁に改元が行われていたので、よほどの専門知識を有しない限り、元号と年次のみでは今から何年前の事柄か、あるいはそれぞれ事項の前後関係を理解するのが難しいので、便宜的に該年次⁵⁾が多く含まれる西暦の年次を、元号・年次のあとに（ ）を用いて記している。

たとえば、赤穂浪士の吉良義央邸討ち入りの日時を「元禄15年（1702）12月15日未明⁵⁾」と記している

*東京都江戸東京博物館専門調査員

場合が多い。ところが、この「元禄15年12月15日」というのは、当時わが国で採用されていた暦、太陰太陽暦の一種の「貞享暦」⁶⁾の日付で、これを当時ヨーロッパのいくつかの国で用いられていたグレゴリオ暦に変換すると、1703年1月31日で、() 内の年次と1年の齟齬を生じる。これは、グレゴリオ暦と、わが国で明治5年12月2日まで使われていた太陰太陽暦（以下「旧暦」と略記する）との「ズレ」によって生じるのであるが、「正確」を旨とする歴史学において、決して看過できる数値ではない。

本稿の趣旨

本稿では、旧暦そのものの不合理性（不規則性）と、西暦と和暦および和暦そのものに内在する「ズレ」がどの位あるのかを検証し、合理的な和暦の西暦表示の方法を提言する。

1. 太陽暦と太陰暦と太陰太陽暦

『日本国語大辞典』（1972～76年、小学館刊）によると、暦（こよみ）は、「時の流れを、一日を単位として、年・月・週などによって区切り、数えるようにした体系」とある。おもな暦には、地球の公転に起因する太陽の運行に基づく太陽暦と、月（太陰）の公転に起因する月の満ち欠けに基づく太陰暦と、この両者を無理やり結びつけた太陰太陽暦がある。

太陽暦

基準値は、地球の平均公転周期^{たいようねん} = 1 太陽年 \div 365.2422日である。この基準値の時間がかかなり長いので、年の下に1 朔望月^{さくぼうげつ}（後出、月の満ち欠けの周期）の近似値の $1/12$ 太陽年 = 1 節月^{せつげつ} \div 30.43685日を設定して、1 太陽年を12に分割した「月」^{がつ}を設けた体系である。1 節月の端数0.43685日は、ひと月を30日とする小の月と、31日の大の月の組み合わせで処理している。⁷⁾ 1 太陽年の端数0.2422日は、当初4年に1 日閏日を設けて処理した（ユリウス暦）が、この方法では約128年で1 日多くなるので、400年に3 回閏日を削減するようにしたのが、現行のグレゴリオ暦である。⁸⁾

太陰暦

基準値は、見掛けの月の平均公転周期 = 1 朔望月 \div 29.530589日である。ひと月を1 朔望月とし、その上の単位として1 太陽年の近似値12 朔望月 = 1 朔望年^{さくぼうねん} \div 354.367068日を1 年と設定する体系である。1 朔望月の端数0.530589日は、ひと月を29日とする小の月と、30日の大の月の組み合わせで処理した。また、1 朔望年の端数0.367068日は、平年は354日と355日、閏年は383日と384日の組み合わせで処理した。

ところで、季節は地球の自転軸が約23.5°傾いていることに起因し、地球と太陽の位置関係に左右されるので、太陽暦と連動している。従って太陽暦と太陰暦の1 年の差10.87512日は、3年でひと月、18年で半年のズレを生じ、わが国のように四季が明確な地域では、季節が逆転してしまうのである。つまり、太陰暦は季節と連動していないのである。

太陰暦の長所は、日付と月齢がほぼ一致していることである。電気を利用する技術がなく、高価な蠟

燭や油を燃焼しても、わずかな明るさしか得られなかった時代には、夜間の月明かりですら貴重であったので、日付で月齢が分かり、月明かりが期待できるか否か即座に分かる暦は便利であった。また、月齢は、潮の大小に連動するので、海岸や河口地域では、日付だけで潮の大きさが分かったので、太陰暦は重宝であった。

太陰太陽暦

季節と連動する太陽暦と月の恩恵と連動する太陰暦の双方の長所を取り入れようとしたのが太陰太陽暦である。両者を合体するために、解決しなければならないのは、それぞれの1年の長さの差の解消である。季節のズレを防ぐには、中期的に朔望の1年を太陽年に近づける必要があった。そのため、1年につき10日余のズレが約ひと月分に蓄積した段階で、このひと月を閏月として加えこの年を13ヶ月の閏年としてズレを強引に解消したのである。⁹⁾つまり、12箇月（354～355日）の平年と13箇月（383～384日）の閏年の組み合わせで、1朔望年の平均値を1太陽年に近づけたのである。閏年の設定は、 $19 \text{ 太陽年} \div 6939.6018 \text{ 日}$ 、 $235 \text{ 朔望月} \div 6939.6884 \text{ 日}$ という関係が見出され、 $235 \div 12 = 19 \cdots 7$ の関係式から、19年に7回閏年を設けるようにしたのである。¹⁰⁾

2. 太陰太陽暦

現行のグレゴリオ暦のカレンダーの仕組はほぼ固定し、閏年に2月の日数を1日加える微調整をするだけで、半永久的に造暦が可能である。しかし、元来連動していない太陽と月の運行を強引に結び付けた太陰太陽暦はそうでなくても構造が複雑で、しかも季節のズレを最小限にとどめるために、巧緻な工夫が凝らされた。

造暦の基点

前述の $19 \text{ 太陽年} \div 235 \text{ 朔望月}$ の関係式を用いて、19太陽年を分解した228節月（12節月×19年）に、235朔望月を重ねることにより太陽と月の運行時間をほぼ一致させた。¹¹⁾つまり、基点に戻るようにしたのである。両者を重ねる際、節月には正・2・3…12（以下繰返す）の名称が付され、各節月の最初の日を節気と名付けた。巧緻な工夫がなされたのは、この

【第1表】 二十四節気表

季節	節月名	節気	中気	平均太陽暦日付
春	正月	立春		2月4日頃
			雨水	2月18日頃
	2月	啓蟄		3月5日頃
			春分	3月20日頃
夏	3月	清明		4月4日頃
			穀雨	4月20日頃
	4月	立夏		5月5日頃
			小満	5月21日頃
	5月	芒種		6月5日頃
			夏至	6月21日頃
秋	6月	小暑		7月7日頃
			大暑	7月22日頃
	7月	立秋		8月7日頃
			処暑	8月23日頃
	8月	白露		9月7日頃
			秋分	9月23日頃
冬	9月	寒露		10月8日頃
			霜降	10月23日頃
	10月	立冬		11月7日頃
			小雪	11月22日頃
	11月	大雪		12月7日頃
			冬至	12月21日頃
	12月	小寒		1月5日頃
			大寒	1月20日頃

*季節は各月の朔日から始まるのではなく、立春・立夏のように各季節の最初の節気の日から始まる。

あとで、節気と節気の中に中気を設けたことである。中気には春分・夏至・秋分・冬至という天体観測によって得られる太陽運行の節目を配した。これに節気・中気の平均太陽暦日を配したのが、第1表の「二十四節気表」である。従って二十四節気は、太陽暦の1年を24分割した節目ということになる。¹²⁾

現行の太陽暦の年初(1月1日)は、冬至の10日ほど後に設定され、ほぼ一定であるが、旧暦の年初(正月元日)は太陽暦の年初より約34日後の二十四節気中の正月節気の立春付近としている。これが後述する旧暦と西暦のズレの最大の要因になっている。

「立春付近」としたのは、①旧暦の平年は、太陽暦より10日ほど少なく、②調節のため19年に7回閏月を挿入するので、旧暦の正月元日を太陽暦に換算すると日付が一定しなくなるのである。

ある年の立春を旧暦の正月元日とすると19年周期ではほぼ元に戻るので、この年を造暦の基点として考えてよいだろう。¹³⁾

月名の決定

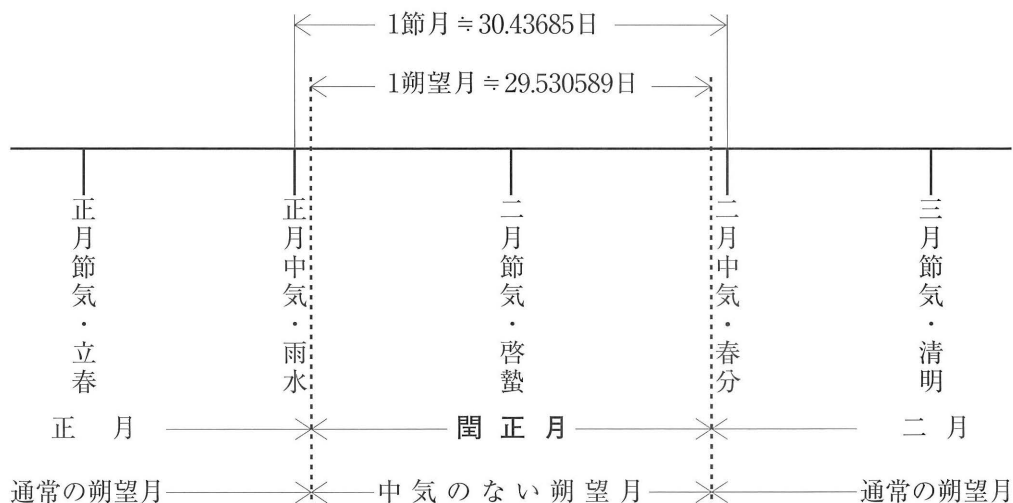
第1表の二十四節気表には、正月から12月までそれぞれの月に中気と節気の一つずつ属している。中気と次の中気との間隔は、節月と同じ約30.43685日で1朔望月の約29.530589日よりわずかに長くなっている。そこで、中気と節気を含む228節月に235朔望月を重ねていくと、ほとんどの朔望月に中気と節気の一つずつ含まれる。

このようにして配置されたそれぞれの朔望月には、含まれる中気が属する月名が付せられた。つまり、正月の中気「雨水」を含む朔望月は正月、二月の中気「春分」を含む朔望月は二月となるのである。

閏月の設定

このようにしていくと、時として中気を含まない朔望月が生じる。月名を、含まれる中気が属する月とする原則から外れるこの朔望月を閏月とし、直前の朔望月の名称に「閏」あるいは「後の」を付した月名とした。¹⁴⁾ こうすることにより、季節のズレを最小限に抑えたのである。ちなみに、中気のない朔望月を図示すると次のようになる。

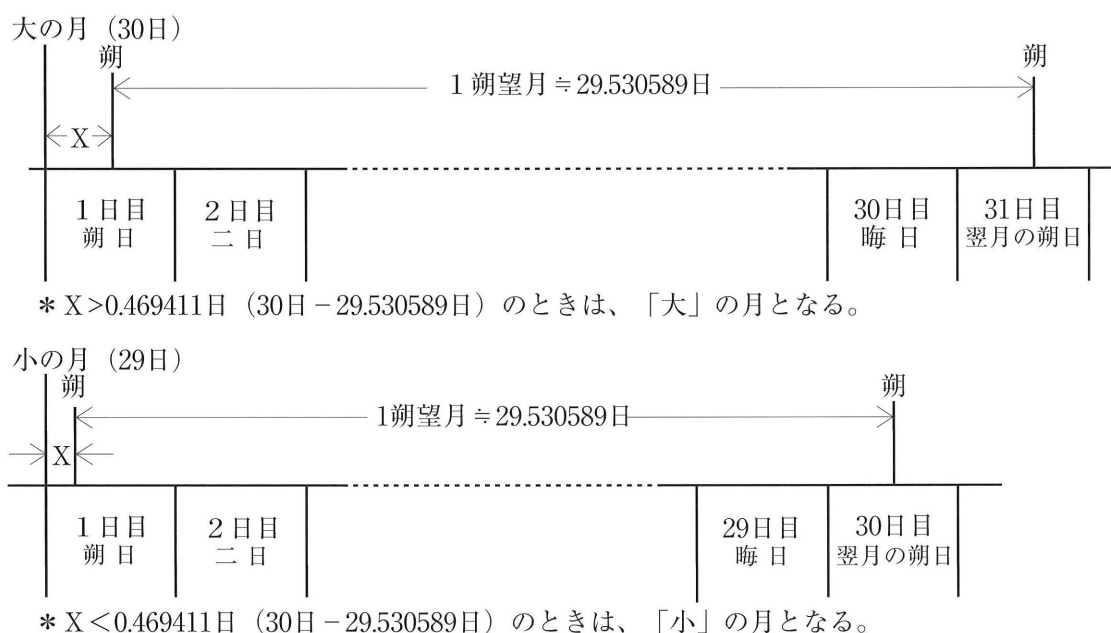
太陰太陽暦の月名と閏月の決め方



大の月と小の月の決め方

朔望月の最初の日、見かけの上で太陽－月－地球が並ぶ「朔（さく）」という天体現象が生じる日で、「朔日（ついたち）」と呼ばれている。朔望月のひと月は、「朔」の現象が生じた日から、次の「朔」が生じる前日（晦日）までで、その月の日数は、その月の朔日に生じた「朔」の時刻によって29日の小の月か、30日の大の月かが決まる。「朔」が生じる時刻は、前述の1朔望月に端数0.530589日があることにより、毎月微妙に変化する。つまり、ある朔望月の「朔」の起こる時刻をX（＝午前0時からの時間、単位は日）とすると、 $X + 0.530589$ 日が1日より大きいと、次の「朔」は31日目に起こるので、その月は大の月とし、小さければ30日目に生じるので、29日の小の月としたのである。0.530589日を時間に直すと12時間44分余となるので、境界は午前11時15分余（24時間－12時間44分余）となる。ちなみに、大の月と小の月の決め方を図示すると次のようになる。

大の月と小の月の決め方



旧暦の公表

このように天体観測の結果や複雑な計算に基づいて造られる旧暦は、造り留めができず、翌年の暦は前年の10月までに造暦・奏聞の上、11月朔日に公表されたのである。¹⁵⁾

3. 旧暦の不合理性（不規則性）の検証

前述のように複雑な方法で造られた旧暦の諸情報を、天正元年正月元日（1573.2.13）から太陽暦への切換えの前日の明治5年12月2日（1872.12.31）までの300年分をまとめて、整理したのが、第2表の「和暦の西暦（グレゴリオ暦）換算便覧」¹⁶⁾である。

始期を天正元年にしたのは ①江戸時代をすべて含むこと ②300年とキリが良いこと ③1582年10月15

【第2表】 和暦の西暦 (グレゴリオ暦) 換算便覧

天正元年～明治5年（1573.2.13～1872.12.31）									
和暦年次	干支	日数	閏月	該年次正月元日 の西暦	小の月	西暦が翌年になる期間		備考	
						該年次の西暦最終日*	該年次最終日の西暦		
天正 元年	癸酉	354		(1573.2.13)	1・2・4・5・8・11	11月27日 (1573.12.31)	12月30日 (1574.2.1)	天正改元：7月28日（1573.9.4）	
天正 2年	甲戌	384	⑪	(1574.2.2)	2・3・5・6・8・⑪	⑩月 8日 (1574.12.31)	12月30日 (1575.2.20)		
天正 3年	乙亥	354		(1575.2.21)	2・3・5・6・8・11	11月19日 (1575.12.31)	12月30日 (1576.2.9)		
天正 4年	丙子	354		(1576.2.10)	2・4・6・7・9・11	12月 2日 (1576.12.31)	12月30日 (1577.1.28)		
天正 5年	丁丑	384	⑦	(1577.1.29)	3・5・7・⑦・9・11	11月12日 (1577.12.31)	12月30日 (1578.2.16)		
天正 6年	戊寅	354		(1578.2.17)	2・5・7・8・10・12	11月23日 (1578.12.31)	12月29日 (1579.2.5)		
天正 7年	己卯	355		(1579.2.6)	2・5・7・9・11	12月 4日 (1579.12.31)	12月30日 (1580.1.26)		
天正 8年	庚辰	384	③	(1580.1.27)	1・3・4・7・9・11	11月15日 (1580.12.31)	12月30日 (1581.2.13)		
天正 9年	辛巳	354		(1581.2.14)	1・3・5・7・10・12	11月26日 (1581.12.31)	12月29日 (1582.2.2)		
天正 10年	壬午	355		(1582.2.3)	2・4・5・7・11	12月 7日 (1582.12.31)	12月30日 (1583.1.23)	グレゴリオ暦に移行：9月19日（1582.10.15）	
天正 11年	癸未	384	①	(1583.1.24)	①・2・4・5・7・10	11月18日 (1583.12.31)	12月30日 (1584.2.11)		
天正 12年	甲申	354		(1584.2.12)	1・3・5・6・8・10	11月30日 (1584.12.31)	12月30日 (1585.1.30)		
天正 13年	乙酉	384	⑧	(1585.1.31)	2・4・6・7・⑧・10	11月11日 (1585.12.31)	12月30日 (1586.2.18)		
天正 14年	丙戌	354		(1586.2.19)	1・4・6・7・9・11	11月21日 (1586.12.31)	12月30日 (1587.2.7)		
天正 15年	丁亥	354		(1587.2.8)	1・4・6・8・10・12	12月 2日 (1587.12.31)	12月29日 (1588.1.27)		
天正 16年	戊子	384	⑤	(1588.1.28)	2・4・6・8・10・12	11月14日 (1588.12.31)	12月29日 (1589.2.14)		
天正 17年	己丑	355		(1589.2.15)	2・4・6・9・11	11月24日 (1589.12.31)	12月30日 (1590.2.4)		
天正 18年	庚寅	354		(1590.2.5)	1・3・4・6・10・12	12月 5日 (1590.12.31)	12月29日 (1591.1.24)		
天正 19年	辛卯	384	①	(1591.1.25)	①・3・4・6・9・12	11月16日 (1591.12.31)	12月29日 (1592.2.12)		
文禄 元年	壬辰	355		(1592.2.13)	2・4・5・7・9	11月28日 (1592.12.31)	12月30日 (1593.2.1)	文禄改元：12月8日（1593.1.10）	
文禄 2年	癸巳	383	⑨	(1593.2.2)	1・3・5・6・8・9・12	11月 9日 (1593.12.31)	12月29日 (1594.2.19)		
文禄 3年	甲午	354		(1594.2.20)	3・5・6・8・9・12	11月20日 (1594.12.31)	12月29日 (1595.2.8)		
文禄 4年	乙未	355		(1595.2.9)	4・5・7・9・10	12月朔日 (1695.12.31)	12月30日 (1596.1.29)		
慶長 元年	丙申	384	⑦	(1596.1.30)	1・4・6・⑦・9・11	11月12日 (1596.12.31)	12月30日 (1597.2.16)	慶長改元：10月27日（1596.12.16）	
慶長 2年	丁酉	354		(1597.2.17)	1・3・6・8・10・12	11月23日 (1597.12.31)	12月29日 (1598.2.5)		
慶長 3年	戊戌	355		(1598.2.6)	2・4・6・9・11	12月 4日 (1598.12.31)	12月30日 (1599.1.26)		
慶長 4年	己亥	384	③	(1599.1.27)	1・3・③・5・8・11	11月14日 (1599.12.31)	12月30日 (1600.2.14)		
慶長 5年	庚子	354		(1600.2.15)	1・3・4・6・8・12	11月26日 (1600.12.31)	12月29日 (1601.2.2)		
慶長 6年	辛丑	384	⑪	(1601.2.3)	2・4・5・7・8・⑪	⑩月 7日 (1601.12.31)	12月30日 (1602.2.21)		
慶長 7年	壬寅	354		(1602.2.22)	2・4・5・6・8・11	11月18日 (1602.12.31)	12月30日 (1603.2.10)		
慶長 8年	癸卯	354		(1603.2.11)	3・5・6・8・9・12	11月29日 (1603.12.31)	12月29日 (1604.1.30)		
慶長 9年	甲辰	384	⑧	(1604.1.31)	3・5・7・⑧・9・11	11月11日 (1604.12.31)	12月30日 (1605.2.17)		
慶長 10年	乙巳	354		(1605.2.18)	2・5・7・9・10・12	11月22日 (1605.12.31)	12月29日 (1606.2.6)		
慶長 11年	丙午	355		(1606.2.7)	3・5・8・10・12	12月 2日 (1606.12.31)	12月29日 (1607.1.27)		
慶長 12年	丁未	384	④	(1607.1.28)	1・3・④・7・10・12	11月13日 (1607.12.31)	12月29日 (1608.2.15)		
慶長 13年	戊申	355		(1608.2.16)	2・3・5・7・11	11月24日 (1608.12.31)	12月30日 (1609.2.4)		
慶長 14年	己酉	354		(1609.2.5)	1・3・4・6・8・11	12月 6日 (1609.12.31)	12月30日 (1610.1.24)		
慶長 15年	庚戌	384	②	(1610.1.25)	2・3・4・5・7・10	11月17日 (1610.12.31)	12月30日 (1611.2.12)		
慶長 16年	辛亥	354		(1611.2.13)	2・4・5・6・8・10	11月28日 (1611.12.31)	12月30日 (1612.2.1)		
慶長 17年	壬子	384	⑩	(1612.2.2)	2・5・6・8・9・⑩	11月10日 (1612.12.31)	12月30日 (1613.2.19)		

慶長 18年	癸丑	354		(1613.2.20)	2・4・6・8・9・11	11月20日 (1613.12.31)	39日	12月30日 (1614.2.8)	
慶長 19年	甲寅	354		(1614.2.9)	2・5・7・9・10・12	12月朔日 (1614.12.31)	28日	12月29日 (1615.1.28)	
元和 元年	乙卯	384	⑥	(1615.1.29)	2・5・⑥・9・11・12	11月11日 (1615.12.31)	47日	12月29日 (1616.2.16)	元和改元：7月13日 (1615.9.5)
元和 2年	丙辰	355		(1616.2.17)	2・4・7・9・12	11月23日 (1616.12.31)	36日	12月29日 (1617.2.5)	
元和 3年	丁巳	355		(1617.2.6)	2・3・5・7・10	12月4日 (1617.12.31)	26日	12月30日 (1618.1.26)	
元和 4年	戊午	384	③	(1618.1.27)	1・3・③・5・6・9	11月15日 (1618.12.31)	45日	12月30日 (1619.2.14)	
元和 5年	己未	354		(1619.2.15)	1・3・4・5・7・9	11月26日 (1619.12.31)	34日	12月30日 (1620.2.3)	
元和 6年	庚申	384	⑫	(1620.2.4)	1・4・5・7・8・10	12月8日 (1620.12.31)	52日	12月30日 (1621.2.21)	
元和 7年	辛酉	354		(1621.2.22)	1・3・5・7・8・10	11月19日 (1621.12.31)	41日	12月30日 (1622.2.10)	
元和 8年	壬戌	354		(1622.2.11)	1・4・6・8・9・11	11月29日 (1622.12.31)	30日	12月30日 (1623.1.30)	
元和 9年	癸亥	384	⑧	(1623.1.31)	1・4・7・⑧・9・11	11月10日 (1623.12.31)	49日	12月30日 (1624.2.18)	
寛永 元年	甲子	354		(1624.2.19)	1・3・6・8・11・12	11月21日 (1624.12.31)	37日	12月29日 (1625.2.6)	寛永改元：2月30日 (1624.4.17)
寛永 2年	乙丑	355		(1625.2.7)	2・4・6・9・12	12月2日 (1625.12.31)	27日	12月29日 (1626.1.27)	
寛永 3年	丙寅	384	④	(1626.1.28)	2・3・④・5・8・12	11月13日 (1626.12.31)	46日	12月29日 (1627.2.15)	
寛永 4年	丁卯	354		(1627.2.16)	2・3・5・6・8・12	11月24日 (1627.12.31)	35日	12月29日 (1628.2.4)	
寛永 5年	戊辰	355		(1628.2.5)	3・4・6・7・9	12月6日 (1628.12.31)	24日	12月30日 (1629.1.24)	
寛永 6年	己巳	383	②	(1629.1.25)	1・②・4・6・7・9・12	11月17日 (1629.12.31)	42日	12月29日 (1630.2.11)	
寛永 7年	庚午	354		(1630.2.12)	3・5・7・8・10・12	11月28日 (1630.12.31)	31日	12月29日 (1631.1.31)	
寛永 8年	辛未	384	⑩	(1631.2.1)	4・6・8・9・⑩・12	11月9日 (1631.12.31)	50日	12月29日 (1632.2.19)	
寛永 9年	壬申	355		(1632.2.20)	3・5・7・9・11	11月20日 (1632.12.31)	39日	12月30日 (1633.2.8)	
寛永 10年	癸酉	354		(1633.2.9)	1・3・5・8・10・12	12月朔日 (1633.12.31)	28日	12月29日 (1634.1.28)	
寛永 11年	甲戌	385	⑦	(1634.1.29)	2・4・6・⑦・10	11月12日 (1634.12.31)	48日	12月30日 (1635.2.17)	
寛永 12年	乙亥	354		(1635.2.18)	1・2・4・5・8・11	11月22日 (1635.12.31)	37日	12月30日 (1636.2.6)	
寛永 13年	丙子	354		(1636.2.7)	2・3・5・6・8・12	12月4日 (1636.12.31)	25日	12月29日 (1637.1.25)	
寛永 14年	丁丑	384	③	(1637.1.26)	3・③・5・6・8・11	11月15日 (1637.12.31)	44日	12月30日 (1638.2.13)	
寛永 15年	戊寅	354		(1638.2.14)	2・4・6・7・9・11	11月26日 (1638.12.31)	33日	12月30日 (1639.2.2)	
寛永 16年	己卯	384	⑪	(1639.2.3)	3・5・7・8・10・⑪	⑩月7日 (1639.12.31)	52日	12月30日 (1640.2.21)	
寛永 17年	庚辰	354		(1640.2.22)	2・5・6・8・10・12	11月19日 (1640.12.31)	40日	12月29日 (1641.2.9)	
寛永 18年	辛巳	355		(1641.2.10)	2・5・7・9・11	11月29日 (1641.12.31)	30日	12月30日 (1642.1.30)	
寛永 19年	壬午	384	⑨	(1642.1.31)	1・3・5・8・⑨・11	11月10日 (1642.12.31)	49日	12月30日 (1643.2.18)	
寛永 20年	癸未	354		(1643.2.19)	1・3・4・7・10・12	11月21日 (1643.12.31)	38日	12月29日 (1644.2.7)	
寛永 21年	甲申	355		(1644.2.8)	2・4・5・7・11	12月3日 (1644.12.31)	27日	12月30日 (1645.1.27)	正保改元：12月16日 (1645.1.13)
正保 2年	乙酉	384	⑤	(1645.1.28)	1・3・5・⑤・7・10	11月14日 (1645.12.31)	46日	12月30日 (1646.2.15)	
正保 3年	丙戌	354		(1646.2.16)	1・3・5・6・8・10	11月25日 (1646.12.31)	35日	12月30日 (1647.2.4)	
正保 4年	丁亥	354		(1647.2.5)	2・4・6・7・8・11	12月6日 (1647.12.31)	24日	12月30日 (1648.1.24)	
慶安 元年	戊子	384	①	(1648.1.25)	①・4・5・7・9・11	11月17日 (1648.12.31)	42日	12月30日 (1649.2.11)	慶安改元：2月15日 (1648.4.7)
慶安 2年	己丑	354		(1649.2.12)	1・4・6・8・10・12	11月28日 (1649.12.31)	31日	12月29日 (1650.1.31)	
慶安 3年	庚寅	384	⑩	(1650.2.1)	2・4・7・9・⑩・12	11月9日 (1650.12.31)	50日	12月29日 (1651.2.19)	
慶安 4年	辛卯	355		(1651.2.20)	2・4・6・9・11	11月19日 (1651.12.31)	40日	12月30日 (1652.2.9)	
承応 元年	壬辰	354		(1652.2.10)	1・3・4・6・9・12	12月朔日 (1652.12.31)	28日	12月29日 (1653.1.28)	承応改元：9月18日 (1652.10.20)
承応 2年	癸巳	384	⑥	(1653.1.29)	2・4・5・⑥・9・12	11月12日 (1653.12.31)	47日	12月29日 (1654.2.16)	
承応 3年	甲午	355		(1654.2.17)	2・4・5・7・9	11月23日 (1654.12.31)	37日	12月30日 (1655.2.6)	
明暦 元年	乙未	354		(1655.2.7)	1・3・5・6・7・9	12月4日 (1655.12.31)	26日	12月30日 (1656.1.26)	明暦改元：4月13日 (1655.5.18)
明暦 2年	丙申	383	④	(1656.1.27)	1・4・5・6・7・9・12	11月16日 (1656.12.31)	43日	12月29日 (1657.2.12)	
明暦 3年	丁酉	355		(1657.2.13)	4・5・7・9・10	11月27日 (1657.12.31)	33日	12月30日 (1658.2.2)	
万治 元年	戊戌	384	⑫	(1658.2.3)	1・4・6・8・10・11	12月8日 (1658.12.31)	52日	12月30日 (1659.2.21)	万治改元：7月23日 (1658.8.21)

万治 2 年	己亥	354		(1659.2.22)	1・3・6・8・10・12	11月18日 (1659.12.31)	41日	12月29日 (1660.2.10)	
万治 3 年	庚子	355		(1660.2.11)	2・3・6・9・11	11月29日 (1660.12.31)	30日	12月30日 (1661.1.30)	
寛文 元年	辛丑	384	⑧	(1661.1.31)	1・3・4・6・⑧・11	11月10日 (1661.12.31)	49日	12月30日 (1662.2.18)	寛文改元：4月25日 (1661.5.23)
寛文 2 年	壬寅	354		(1662.2.19)	1・3・4・6・8・12	11月21日 (1662.12.31)	38日	12月29日 (1663.2.7)	
寛文 3 年	癸卯	354		(1663.2.8)	2・4・5・6・8・12	12月2日 (1663.12.31)	27日	12月29日 (1664.1.27)	
寛文 4 年	甲辰	384	⑤	(1664.1.28)	3・5・⑤・6・8・11	11月14日 (1664.12.31)	45日	12月30日 (1665.2.14)	
寛文 5 年	乙巳	354		(1665.2.15)	3・5・6・7・9・12	11月25日 (1665.12.31)	34日	12月29日 (1666.2.3)	
寛文 6 年	丙午	354		(1666.2.4)	3・5・7・9・10・12	12月6日 (1666.12.31)	23日	12月29日 (1667.1.23)	
寛文 7 年	丁未	384	②	(1667.1.24)	②・5・7・9・10・12	11月17日 (1667.12.31)	42日	12月29日 (1668.2.11)	
寛文 8 年	戊申	355		(1668.2.12)	3・5・8・10・12	11月28日 (1668.12.31)	31日	12月29日 (1669.1.31)	
寛文 9 年	己酉	384	⑩	(1669.2.1)	1・3・5・8・⑩・12	11月9日 (1669.12.31)	50日	12月29日 (1670.2.19)	
寛文 10 年	庚戌	355		(1670.2.20)	1・3・5・7・11	11月19日 (1670.12.31)	40日	12月30日 (1671.2.9)	
寛文 11 年	辛亥	354		(1671.2.10)	1・3・4・6・7・11	12月朔日 (1671.12.31)	29日	12月30日 (1672.1.29)	
寛文 12 年	壬子	384	⑥	(1672.1.30)	2・4・5・6・7・10	11月13日 (1672.12.31)	47日	12月30日 (1673.2.16)	
延宝 元年	癸丑	354		(1673.2.17)	2・4・5・6・8・10	11月24日 (1673.12.31)	36日	12月30日 (1674.2.5)	延宝改元：9月21日 (1673.10.30)
延宝 2 年	甲寅	354		(1674.2.6)	2・4・6・7・9・11	12月5日 (1674.12.31)	25日	12月30日 (1675.1.25)	
延宝 3 年	乙卯	384	④	(1675.1.26)	2・④・6・8・9・11	11月15日 (1675.12.31)	44日	12月30日 (1676.2.13)	
延宝 4 年	丙辰	354		(1676.2.14)	2・5・7・9・10・12	11月27日 (1676.12.31)	32日	12月29日 (1677.2.1)	
延宝 5 年	丁巳	384	⑫	(1677.2.2)	2・5・7・10・12・⑫	12月7日 (1677.12.31)	51日	⑫月29日 (1678.2.20)	
延宝 6 年	戊午	355		(1678.2.21)	2・4・6・9・12	11月18日 (1678.12.31)	41日	12月29日 (1679.2.10)	
延宝 7 年	己未	355		(1679.2.11)	1・3・5・7・10	11月29日 (1679.12.31)	31日	12月30日 (1680.1.31)	
延宝 8 年	庚申	384	⑧	(1680.2.1)	1・3・4・5・7・9	11月11日 (1680.12.31)	49日	12月30日 (1681.2.18)	
天和 元年	辛酉	354		(1681.2.19)	1・3・4・5・7・9	11月22日 (1681.12.31)	38日	12月30日 (1682.2.7)	天和改元：9月29日 (1681.11.9)
天和 2 年	壬戌	354		(1682.2.8)	1・4・5・6・8・10	12月3日 (1682.12.31)	27日	12月30日 (1683.1.27)	
天和 3 年	癸亥	384	⑤	(1683.1.28)	2・4・⑤・6・8・10	11月14日 (1683.12.31)	46日	12月30日 (1684.2.15)	
貞享 元年	甲子	354		(1684.2.16)	1・4・6・8・9・11	11月25日 (1684.12.31)	34日	12月30日 (1685.2.3)	貞享改元：2月21日 (1684.4.5)
貞享 2 年	乙丑	354		(1685.2.4)	1・3・6・8・10・12	12月6日 (1685.12.31)	23日	12月29日 (1686.1.23)	
貞享 3 年	丙寅	384	③	(1686.1.24)	2・③・5・8・10・12	11月17日 (1686.12.31)	42日	12月29日 (1687.2.11)	
貞享 4 年	丁卯	355		(1687.2.12)	2・3・5・8・11	11月27日 (1687.12.31)	32日	12月30日 (1688.2.1)	
元禄 元年	戊辰	354		(1688.2.2)	1・3・4・6・8・12	12月9日 (1688.12.31)	20日	12月29日 (1689.1.20)	元禄改元：9月30日 (1688.10.23)
元禄 2 年	己巳	384	①	(1689.1.21)	①・3・4・6・8・12	11月20日 (1689.12.31)	39日	12月29日 (1690.2.8)	
元禄 3 年	庚午	354		(1690.2.9)	2・4・5・7・8・11	12月2日 (1690.12.31)	28日	12月30日 (1691.1.28)	
元禄 4 年	辛未	384	⑧	(1691.1.29)	3・5・6・8・⑧・11	11月12日 (1691.12.31)	47日	12月30日 (1692.2.16)	
元禄 5 年	壬申	354		(1692.2.17)	2・5・6・8・9・11	11月24日 (1692.12.31)	35日	12月30日 (1693.2.4)	
元禄 6 年	癸酉	354		(1693.2.5)	3・5・7・9・10・12	12月5日 (1693.12.31)	24日	12月29日 (1694.1.24)	
元禄 7 年	甲戌	384	⑤	(1694.1.25)	3・⑤・7・9・11・12	11月15日 (1694.12.31)	43日	12月29日 (1695.2.12)	
元禄 8 年	乙亥	355		(1695.2.13)	2・5・7・10・12	11月26日 (1695.12.31)	33日	12月29日 (1696.2.2)	
元禄 9 年	丙子	355		(1696.2.3)	2・3・5・8・11	12月8日 (1696.12.31)	22日	12月30日 (1697.1.22)	
元禄 10 年	丁丑	384	②	(1697.1.23)	1・②・3・5・7・10	11月19日 (1697.12.31)	41日	12月30日 (1698.2.10)	
元禄 11 年	戊寅	354		(1698.2.11)	1・3・4・6・7・10	11月30日 (1698.12.31)	30日	12月30日 (1699.1.30)	
元禄 12 年	己卯	384	⑨	(1699.1.31)	2・4・5・7・8・⑨	11月11日 (1699.12.31)	49日	12月30日 (1700.2.18)	
元禄 13 年	庚辰	354		(1700.2.19)	2・4・5・7・8・10	11月22日 (1700.12.31)	38日	12月30日 (1701.2.7)	
元禄 14 年	辛巳	354		(1701.2.8)	2・4・6・8・9・11	12月3日 (1701.12.31)	27日	12月30日 (1702.1.27)	
元禄 15 年	壬午	384	⑧	(1702.1.28)	2・5・7・⑧・9・11	11月13日 (1702.12.31)	46日	12月30日 (1703.2.15)	
元禄 16 年	癸未	354		(1703.2.16)	1・4・7・9・11・12	11月23日 (1703.12.31)	35日	12月29日 (1704.2.4)	宝永改元：3月13日 (1704.4.16)
宝永 元年	甲申	355		(1704.2.5)	2・4・7・10・12	12月5日 (1704.12.31)	24日	12月29日 (1705.1.24)	

宝永 2 年	乙酉	384	④	(1705.1.25)	2・3・④・6・9・12	11月16日 (1705.12.31)	43日	12月29日 (1706.2.12)	
宝永 3 年	丙戌	355		(1706.2.13)	2・3・5・6・9	11月27日 (1706.12.31)	33日	12月30日 (1707.2.2)	
宝永 4 年	丁亥	354		(1707.2.3)	1・3・4・6・7・9	12月8日 (1707.12.31)	22日	12月30日 (1708.1.22)	
宝永 5 年	戊子	384	①	(1708.1.23)	①・3・4・6・7・9	11月20日 (1708.12.31)	40日	12月30日 (1709.2.9)	
宝永 6 年	己丑	354		(1709.2.10)	1・4・5・7・8・10	12月朔日 (1709.12.31)	29日	12月30日 (1710.1.29)	
宝永 7 年	庚寅	383	⑧	(1710.1.30)	1・4・6・8・⑧・10・12	11月12日 (1710.12.31)	47日	12月29日 (1711.2.16)	
正徳 元年	辛卯	355		(1711.2.17)	4・6・8・9・11	11月22日 (1711.12.31)	37日	12月30日 (1712.2.6)	正徳改元：4月25日 (1711.6.11)
正徳 2 年	壬辰	354		(1712.2.7)	1・4・6・9・11・12	12月4日 (1712.12.31)	25日	12月29日 (1713.1.25)	
正徳 3 年	癸巳	385	⑤	(1713.1.26)	2・4・⑤・8・11	11月14日 (1713.12.31)	45日	12月30日 (1714.2.14)	
正徳 4 年	甲午	354		(1714.2.15)	1・2・4・6・9・12	11月25日 (1714.12.31)	34日	12月29日 (1705.2.3)	
正徳 5 年	乙未	355		(1715.2.4)	2・3・5・6・9	12月6日 (1715.12.31)	24日	12月30日 (1716.1.24)	
享保 元年	丙申	383	②	(1716.1.25)	1・②・3・5・6・8・12	11月18日 (1716.12.31)	41日	12月29日 (1717.2.10)	享保改元：6月22日 (1716.8.9)
享保 2 年	丁酉	354		(1717.2.11)	3・4・6・7・9・12	11月29日 (1717.12.31)	30日	12月29日 (1718.1.30)	
享保 3 年	戊戌	384	⑩	(1718.1.31)	3・5・7・8・10・11	11月10日 (1718.12.31)	49日	12月30日 (1719.2.18)	
享保 4 年	己亥	354		(1719.2.19)	3・5・7・8・10・12	11月21日 (1719.12.31)	38日	12月29日 (1720.2.7)	
享保 5 年	庚子	355		(1720.2.8)	3・6・8・9・11	12月3日 (1720.12.31)	27日	12月30日 (1721.1.27)	
享保 6 年	辛丑	384	⑦	(1721.1.28)	1・3・6・⑦・9・11	11月13日 (1721.12.31)	46日	12月30日 (1722.2.15)	
享保 7 年	壬寅	354		(1722.2.16)	1・3・5・8・10・12	11月24日 (1722.12.31)	35日	12月29日 (1723.2.4)	
享保 8 年	癸卯	355		(1723.2.5)	2・4・5・8・11	12月5日 (1723.12.31)	25日	12月30日 (1724.1.25)	
享保 9 年	甲辰	384	④	(1724.1.26)	2・3・④・5・7・11	11月16日 (1724.12.31)	43日	12月30日 (1725.2.12)	
享保 10 年	乙巳	354		(1725.2.13)	2・3・5・6・8・11	11月27日 (1725.12.31)	32日	12月30日 (1726.2.1)	
享保 11 年	丙午	354		(1726.2.2)	2・4・6・7・9・11	12月9日 (1726.12.31)	21日	12月30日 (1727.1.21)	
享保 12 年	丁未	384	①	(1727.1.22)	2・4・6・7・9・11	11月19日 (1727.12.31)	40日	12月30日 (1728.2.9)	
享保 13 年	戊申	354		(1728.2.10)	2・5・7・8・10・12	12月朔日 (1728.12.31)	28日	12月29日 (1729.1.28)	
享保 14 年	己酉	384	⑨	(1729.1.29)	2・5・7・9・10・12	11月12日 (1729.12.31)	47日	12月29日 (1730.2.16)	
享保 15 年	庚戌	355		(1730.2.17)	2・4・7・9・11	11月22日 (1730.12.31)	37日	12月30日 (1731.2.6)	
享保 16 年	辛亥	354		(1731.2.7)	1・3・5・7・10・12	12月3日 (1731.12.31)	26日	12月29日 (1732.1.26)	
享保 17 年	壬子	384	⑤	(1732.1.27)	2・4・5・6・10・12	11月15日 (1732.12.31)	44日	12月29日 (1733.2.13)	
享保 18 年	癸丑	355		(1733.2.14)	2・4・5・7・10	11月26日 (1733.12.31)	34日	12月30日 (1734.2.3)	
享保 19 年	甲寅	354		(1734.2.4)	1・3・5・6・8・10	12月7日 (1734.12.31)	23日	12月30日 (1735.1.23)	
享保 20 年	乙卯	384	③	(1735.1.24)	2・③・5・6・8・10	11月18日 (1735.12.31)	42日	12月30日 (1736.2.11)	
元文 元年	丙辰	354		(1736.2.12)	1・4・6・7・9・10	11月30日 (1736.12.31)	30日	12月30日 (1737.1.30)	元文改元：4月28日 (1736.6.7)
元文 2 年	丁巳	384	⑪	(1737.1.31)	1・5・7・8・10・⑪	⑩月10日 (1737.12.31)	49日	12月30日 (1738.2.18)	
元文 3 年	戊午	354		(1738.2.19)	1・4・6・8・10・12	11月21日 (1738.12.31)	38日	12月29日 (1739.2.7)	
元文 4 年	己未	355		(1739.2.8)	2・4・7・9・11	12月2日 (1739.12.31)	28日	12月30日 (1740.1.28)	
元文 5 年	庚申	384	⑦	(1740.1.29)	1・3・4・7・9・11	11月13日 (1740.12.31)	46日	12月30日 (1741.2.15)	
寛保 元年	辛酉	354		(1741.2.16)	1・3・4・6・9・12	11月24日 (1741.12.31)	35日	12月29日 (1742.2.4)	寛保改元：2月27日 (1741.4.12)
寛保 2 年	壬戌	355		(1742.2.5)	2・4・5・7・9	12月5日 (1742.12.31)	25日	12月30日 (1743.1.25)	
寛保 3 年	癸亥	384	④	(1743.1.26)	1・3・④・5・7・8	11月16日 (1743.12.31)	44日	12月30日 (1744.2.13)	
延享 元年	甲子	353		(1744.2.14)	1・3・5・6・8・9・12	11月28日 (1744.12.31)	31日	12月29日 (1745.1.31)	延享改元：2月21日 (1744.4.3)
延享 2 年	乙丑	384	⑫	(1745.2.1)	4・6・7・9・10・⑫	12月9日 (1745.12.31)	50日	12月29日 (1746.2.19)	
延享 3 年	丙寅	355		(1746.2.20)	3・5・7・9・10	11月20日 (1746.12.31)	40日	12月30日 (1747.2.9)	
延享 4 年	丁卯	354		(1747.2.10)	1・3・6・8・10・12	11月30日 (1747.12.31)	29日	12月29日 (1748.1.29)	
寛延 元年	戊辰	384	⑩	(1748.1.30)	1・4・6・9・⑩・12	11月12日 (1748.12.31)	47日	12月29日 (1749.2.16)	寛延改元：7月12日 (1748.8.5)
寛延 2 年	己巳	355		(1749.2.17)	2・3・5・8・11	11月22日 (1749.12.31)	37日	12月30日 (1750.2.6)	
寛延 3 年	庚午	354		(1750.2.7)	1・3・4・6・8・12	12月3日 (1750.12.31)	26日	12月29日 (1751.1.26)	

宝暦元年	辛未	384	⑥	(1751.1.27)	2・4・5・⑥・8・11	11月14日	(1751.12.31)	45日	12月30日	(1752.2.14)	宝暦改元：10月27日 (1751.12.14)
宝暦2年	壬申	354		(1752.2.15)	2・4・5・7・8・11	11月26日	(1752.12.31)	33日	12月30日	(1753.2.2)	
宝暦3年	癸酉	354		(1753.2.3)	3・5・6・8・9・12	12月7日	(1753.12.31)	22日	12月29日	(1754.1.22)	
宝暦4年	甲戌	384	②	(1754.1.23)	②・5・6・8・9・11	11月18日	(1754.12.31)	41日	12月30日	(1755.2.10)	
宝暦5年	乙亥	354		(1755.2.11)	3・5・7・9・10・12	11月29日	(1755.12.31)	30日	12月29日	(1756.1.30)	
宝暦6年	丙子	384	⑪	(1756.1.31)	3・5・8・10・⑪・12	⑩月10日	(1756.12.31)	48日	12月29日	(1757.2.17)	
宝暦7年	丁丑	355		(1757.2.18)	2・5・7・10・12	11月21日	(1757.12.31)	38日	12月29日	(1758.2.7)	
宝暦8年	戊寅	355		(1758.2.8)	2・3・5・7・11	12月2日	(1758.12.31)	28日	12月30日	(1759.1.28)	
宝暦9年	己卯	384	⑦	(1759.1.29)	1・3・4・6・⑦・10	11月13日	(1759.12.31)	47日	12月30日	(1760.2.16)	
宝暦10年	庚辰	354		(1760.2.17)	1・3・4・6・7・10	11月25日	(1760.12.31)	35日	12月30日	(1761.2.4)	
宝暦11年	辛巳	354		(1761.2.5)	2・4・5・7・8・10	12月6日	(1761.12.31)	24日	12月30日	(1762.1.24)	
宝暦12年	壬午	384	④	(1762.1.25)	3・④・5・7・8・10	11月17日	(1762.12.31)	43日	12月30日	(1763.2.12)	
宝暦13年	癸未	354		(1763.2.13)	2・4・6・8・9・11	11月27日	(1763.12.31)	32日	12月30日	(1764.2.1)	
明和元年	甲申	384	⑫	(1764.2.2)	2・5・7・9・10・12	12月9日	(1764.12.31)	50日	12月30日	(1765.2.19)	明和改元：6月2日 (1764.6.30)
明和2年	乙酉	354		(1765.2.20)	1・4・7・9・11・12	11月19日	(1765.12.31)	39日	12月29日	(1766.2.8)	
明和3年	丙戌	355		(1766.2.9)	2・4・7・10・12	11月30日	(1766.12.31)	29日	12月29日	(1767.1.29)	
明和4年	丁亥	384	⑨	(1767.1.30)	1・3・5・7・⑨・12	11月11日	(1767.12.31)	48日	12月29日	(1768.2.17)	
明和5年	戊子	355		(1768.2.18)	2・3・5・6・9	11月23日	(1768.12.31)	37日	12月30日	(1769.2.6)	
明和6年	己丑	354		(1769.2.7)	1・3・4・6・7・9	12月4日	(1769.12.31)	26日	12月30日	(1770.1.26)	
明和7年	庚寅	384	⑥	(1770.1.27)	2・4・5・⑥・7・9	11月15日	(1770.12.31)	45日	12月30日	(1771.2.14)	
明和8年	辛卯	354		(1771.2.15)	1・3・5・7・8・10	11月26日	(1771.12.31)	34日	12月30日	(1772.2.3)	
安永元年	壬辰	354		(1772.2.4)	1・4・6・8・9・11	12月8日	(1772.12.31)	22日	12月30日	(1773.1.22)	安永改元：11月16日 (1772.12.10)
安永2年	癸巳	384	③	(1773.1.23)	1・③・6・8・9・11	11月18日	(1773.12.31)	41日	12月30日	(1774.2.10)	
安永3年	甲午	354		(1774.2.11)	1・4・6・8・10・12	11月29日	(1774.12.31)	30日	12月29日	(1775.1.30)	
安永4年	乙未	384	⑫	(1775.1.31)	2・4・6・9・12・⑫	12月9日	(1775.12.31)	49日	12月29日	(1776.2.18)	
安永5年	丙申	355		(1776.2.19)	2・4・6・8・12	11月21日	(1776.12.31)	38日	12月29日	(1777.2.7)	
安永6年	丁酉	354		(1777.2.8)	2・3・5・6・8・12	12月2日	(1777.12.31)	27日	12月29日	(1778.1.27)	
安永7年	戊戌	384	⑦	(1778.1.28)	3・4・6・7・8・12	11月13日	(1778.12.31)	46日	12月29日	(1779.2.15)	
安永8年	己亥	354		(1779.2.16)	3・4・6・7・9・12	11月24日	(1779.12.31)	35日	12月29日	(1780.2.4)	
安永9年	庚子	354		(1780.2.5)	3・5・7・8・10・12	12月6日	(1780.12.31)	23日	12月29日	(1781.1.23)	
天明元年	辛丑	384	⑤	(1781.1.24)	4・⑤・7・8・10・12	11月17日	(1781.12.31)	42日	12月29日	(1782.2.11)	天明改元：4月2日 (1781.4.25)
天明2年	壬寅	355		(1782.2.12)	3・5・7・9・11	11月27日	(1782.12.31)	32日	12月30日	(1783.2.1)	
天明3年	癸卯	354		(1783.2.2)	1・3・6・8・10・12	12月8日	(1783.12.31)	21日	12月29日	(1784.1.21)	
天明4年	甲辰	384	①	(1784.1.22)	①・3・5・8・10・12	11月20日	(1784.12.31)	39日	12月29日	(1785.2.8)	
天明5年	乙巳	355		(1785.2.9)	2・4・5・8・11	12月朔日	(1785.12.31)	29日	12月30日	(1786.1.29)	
天明6年	丙午	384	⑩	(1786.1.30)	1・3・5・6・8・11	11月11日	(1786.12.31)	48日	12月30日	(1787.2.17)	
天明7年	丁未	354		(1787.2.18)	2・3・5・6・8・11	11月22日	(1787.12.31)	37日	12月30日	(1788.2.6)	
天明8年	戊申	354		(1788.2.7)	2・4・6・7・9・11	12月5日	(1788.12.31)	25日	12月30日	(1789.1.25)	
寛政元年	己酉	384	⑥	(1789.1.26)	3・5・⑥・7・9・11	11月15日	(1789.12.31)	44日	12月30日	(1790.2.13)	寛政改元：正月25日 (1789.2.19)
寛政2年	庚戌	354		(1790.2.14)	2・5・7・8・10・12	11月26日	(1790.12.31)	33日	12月29日	(1791.2.2)	
寛政3年	辛亥	355		(1791.2.3)	2・5・7・9・11	12月7日	(1791.12.31)	23日	12月30日	(1792.1.23)	
寛政4年	壬子	384	②	(1792.1.24)	1・②・4・7・9・11	11月18日	(1792.12.31)	41日	12月30日	(1793.2.10)	
寛政5年	癸丑	354		(1793.2.11)	1・3・5・7・10・12	11月29日	(1793.12.31)	30日	12月29日	(1794.1.30)	
寛政6年	甲寅	384	⑪	(1794.1.31)	2・4・5・7・11・12	⑩月10日	(1794.12.31)	49日	12月29日	(1795.2.18)	
寛政7年	乙卯	355		(1795.2.19)	2・4・5・7・10	11月21日	(1795.12.31)	39日	12月30日	(1796.2.8)	
寛政8年	丙辰	354		(1796.2.9)	1・3・5・6・8・10	12月3日	(1796.12.31)	27日	12月30日	(1797.1.27)	

寛政 9 年	丁巳	384	⑦	(1797.1.28)	2・4・6・7・7・⑦・9	11月14日 (1797.12.31)	46日	12月30日 (1798.2.15)	
寛政 10 年	戊午	354		(1798.2.16)	1・4・6・7・9・10	11月25日 (1798.12.31)	35日	12月30日 (1799.2. 4)	
寛政 11 年	己未	354		(1799.2. 5)	1・5・6・8・10・11	12月 6日 (1799.12.31)	24日	12月30日 (1800.1.24)	
寛政 12 年	庚申	384	④	(1800.1.25)	2・④・6・8・10・12	11月16日 (1800.12.31)	43日	12月29日 (1801.2.12)	
享和 元年	辛酉	355		(1801.2.13)	2・4・6・9・11	11月26日 (1801.12.31)	33日	12月30日 (1802.2. 2)	享和改元：2月5日 (1801.3.19)
享和 2 年	壬戌	354		(1802.2. 3)	1・3・4・6・10・12	12月 7日 (1802.12.31)	22日	12月29日 (1803.1.22)	
享和 3 年	癸亥	384	①	(1803.1.23)	①・3・4・6・9・12	11月18日 (1803.12.31)	41日	12月29日 (1804.2.10)	
文化 元年	甲子	355		(1804.2.11)	2・4・5・7・9	11月30日 (1804.12.31)	30日	12月30日 (1805.1.30)	文化改元：2月11日 (1804.3.22)
文化 2 年	乙丑	383	⑧	(1805.1.31)	1・3・5・6・7・⑧・12	11月11日 (1805.12.31)	48日	12月29日 (1806.2.17)	
文化 3 年	丙寅	354		(1806.2.18)	3・5・6・7・9・12	11月22日 (1806.12.31)	37日	12月29日 (1807.2. 6)	
文化 4 年	丁卯	355		(1807.2. 7)	4・6・7・9・10	12月 3日 (1807.12.31)	27日	12月30日 (1808.1.27)	
文化 5 年	戊辰	383	⑥	(1808.1.28)	1・4・6・7・9・10・12	11月15日 (1808.12.31)	44日	12月29日 (1809.2.13)	
文化 6 年	己巳	355		(1809.2.14)	3・6・8・10・12	11月25日 (1809.12.31)	34日	12月29日 (1810.2. 3)	
文化 7 年	庚午	355		(1810.2. 4)	1・3・6・9・11	12月 6日 (1810.12.31)	24日	12月30日 (1811.1.24)	
文化 8 年	辛未	384	②	(1811.1.25)	1・2・3・5・8・11	11月16日 (1811.12.31)	43日	12月30日 (1812.2.12)	
文化 9 年	壬申	354		(1812.2.13)	1・3・4・6・8・12	11月28日 (1812.12.31)	31日	12月29日 (1813.1.31)	
文化 10 年	癸酉	384	⑪	(1813.2. 1)	2・4・5・6・8・⑪	⑩月 9日 (1813.12.31)	50日	12月30日 (1814.2.19)	
文化 11 年	甲戌	354		(1814.2.20)	2・4・5・6・8・11	11月20日 (1814.12.31)	39日	12月30日 (1815.2. 8)	
文化 12 年	乙亥	354		(1815.2. 9)	3・5・6・7・9・11	12月 2日 (1815.12.31)	28日	12月30日 (1816.1.28)	
文化 13 年	丙子	384	⑧	(1816.1.29)	3・5・7・⑧・9・11	11月13日 (1816.12.31)	46日	12月30日 (1817.2.15)	
文化 14 年	丁丑	354		(1817.2.16)	2・5・7・9・10・12	11月24日 (1817.12.31)	35日	12月29日 (1818.2. 4)	
文政 元年	戊寅	355		(1818.2. 5)	3・5・8・10・11	12月 5日 (1818.12.31)	25日	12月30日 (1819.1.25)	文政改元：4月22日 (1818.5.26)
文政 2 年	己卯	384	④	(1819.1.26)	1・3・④・7・10・12	11月15日 (1819.12.31)	44日	12月29日 (1820.2.13)	
文政 3 年	庚辰	355		(1820.2.14)	1・3・5・7・11	11月26日 (1820.12.31)	33日	12月30日 (1821.2. 2)	
文政 4 年	辛巳	354		(1821.2. 3)	1・3・4・6・8・11	12月 8日 (1821.12.31)	22日	12月30日 (1822.1.22)	
文政 5 年	壬午	384	①	(1822.1.23)	①・3・4・5・7・10	11月19日 (1822.12.31)	41日	12月30日 (1823.2.10)	
文政 6 年	癸未	354		(1823.2.11)	2・4・5・6・8・10	11月30日 (1823.12.31)	30日	12月30日 (1824.1.30)	
文政 7 年	甲申	384	⑧	(1824.1.31)	3・4・6・7・⑧・10	11月12日 (1824.12.31)	48日	12月30日 (1825.2.17)	
文政 8 年	乙酉	354		(1825.2.18)	2・4・6・8・9・11	11月22日 (1825.12.31)	37日	12月30日 (1826.2. 6)	
文政 9 年	丙戌	354		(1826.2. 7)	2・5・7・9・10・12	12月 3日 (1826.12.31)	26日	12月29日 (1827.1.26)	
文政 10 年	丁亥	384	⑥	(1827.1.27)	2・5・⑥・9・10・12	11月14日 (1827.12.31)	45日	12月29日 (1828.2.14)	
文政 11 年	戊子	355		(1828.2.15)	2・4・7・9・12	11月25日 (1828.12.31)	34日	12月29日 (1829.2. 3)	
文政 12 年	己丑	355		(1829.2. 4)	1・3・5・7・10	12月 6日 (1829.12.31)	24日	12月30日 (1830.1.24)	
文政 13 年	庚寅	384	③	(1830.1.25)	1・2・③・5・6・9	11月17日 (1830.12.31)	43日	12月30日 (1831.2.12)	天保改元：12月10日 (1831.1.23)
天保 2 年	辛卯	354		(1831.2.13)	1・3・4・5・7・9	11月28日 (1831.12.31)	32日	12月30日 (1832.2. 1)	
天保 3 年	壬辰	384	⑪	(1832.2. 2)	2・4・5・6・8・10	⑩月10日 (1832.12.31)	50日	12月30日 (1833.2.19)	
天保 4 年	癸巳	354		(1833.2.20)	1・3・5・6・8・10	11月21日 (1833.12.31)	39日	12月30日 (1834.2. 8)	
天保 5 年	甲午	354		(1834.2. 9)	1・4・6・7・9・11	12月 2日 (1834.12.31)	28日	12月30日 (1835.1.28)	
天保 6 年	乙未	384	⑦	(1835.1.29)	1・4・7・⑦・9・11	11月12日 (1835.12.31)	47日	12月30日 (1836.2.16)	
天保 7 年	丙申	354		(1836.2.17)	1・3・6・8・10・12	11月24日 (1836.12.31)	35日	12月29日 (1837.2. 4)	
天保 8 年	丁酉	355		(1837.2. 5)	2・4・6・9・11	12月 5日 (1837.12.31)	25日	12月30日 (1838.1.25)	
天保 9 年	戊戌	384	④	(1838.1.26)	1・3・④・5・8・11	11月15日 (1838.12.31)	44日	12月30日 (1839.2.13)	
天保 10 年	己亥	354		(1839.2.14)	1・3・4・6・8・12	11月26日 (1839.12.31)	33日	12月29日 (1840.2. 2)	
天保 11 年	庚子	355		(1840.2. 3)	3・4・5・7・9	12月 8日 (1840.12.31)	22日	12月30日 (1841.1.22)	
天保 12 年	辛丑	383	①	(1841.1.23)	1・2・4・5・7・9・12	11月19日 (1841.12.31)	40日	12月29日 (1842.2. 9)	
天保 13 年	壬寅	354		(1842.2.10)	3・5・6・8・10・12	11月30日 (1842.12.31)	29日	12月29日 (1843.1.29)	

天保 14年	癸卯	384	⑨	(1843.1.30)	4・6・7・9・10・12	11月11日 (1843.12.31)	48日	12月29日 (1844.2.17)		
天保 15年	甲辰	355		(1844.2.18)	3・5・7・9・11	11月22日 (1844.12.31)	37日	12月30日 (1845.2.6)	弘化改元：12月2日 (1845.1.9)	
弘化 2年	乙巳	354		(1845.2.7)	1・3・6・8・10・12	12月 3日 (1845.12.31)	26日	12月29日 (1846.1.26)		
弘化 3年	丙午	384	⑤	(1846.1.27)	2・4・⑤・8・10・12	11月14日 (1846.12.31)	45日	12月29日 (1847.2.14)		
弘化 4年	丁未	355		(1847.2.15)	2・4・5・8・11	11月24日 (1847.12.31)	35日	12月30日 (1848.2.4)		
嘉永 元年	戊申	354		(1848.2.5)	1・3・4・6・8・12	12月 6日 (1848.12.31)	23日	12月29日 (1849.1.23)	嘉永改元：2月28日 (1848.4.1)	
嘉永 2年	己酉	384	④	(1849.1.24)	2・4・④・6・8・11	11月17日 (1849.12.31)	42日	12月30日 (1850.2.11)		
嘉永 3年	庚戌	354		(1850.2.12)	2・4・5・7・9・11	11月28日 (1850.12.31)	31日	12月30日 (1851.1.31)		
嘉永 4年	辛亥	354		(1851.2.1)	3・5・6・8・10・12	12月 9日 (1851.12.31)	20日	12月29日 (1852.1.20)		
嘉永 5年	壬子	384	②	(1852.1.21)	②・5・6・8・10・12	11月21日 (1852.12.31)	38日	12月29日 (1853.2.7)		
嘉永 6年	癸丑	355		(1853.2.8)	2・5・7・9・11	12月 2日 (1853.12.31)	28日	12月30日 (1854.1.28)		
嘉永 7年	甲寅	384	⑦	(1854.1.29)	1・3・5・⑦・9・11	11月12日 (1854.12.31)	47日	12月30日 (1855.2.16)	安政改元：11月27日 (1855.1.15)	
安政 2年	乙卯	354		(1855.2.17)	1・3・4・7・10・12	11月23日 (1855.12.31)	36日	12月29日 (1856.2.5)		
安政 3年	丙辰	355		(1856.2.6)	2・3・5・7・11	12月 5日 (1856.12.31)	25日	12月30日 (1857.1.25)		
安政 4年	丁巳	384	⑤	(1857.1.26)	1・3・4・⑤・7・10	11月16日 (1857.12.31)	44日	12月30日 (1858.2.13)		
安政 5年	戊午	354		(1858.2.14)	1・3・4・6・7・10	11月27日 (1858.12.31)	33日	12月30日 (1859.2.2)		
安政 6年	己未	354		(1859.2.3)	2・4・5・7・8・10	12月 8日 (1859.12.31)	22日	12月30日 (1860.1.22)		
万延 元年	庚申	384	③	(1860.1.23)	2・4・5・7・8・10	11月20日 (1860.12.31)	40日	12月30日 (1861.2.9)	万延改元：3月18日 (1860.4.8)	
文久 元年	辛酉	354		(1861.2.10)	1・4・6・8・10・11	12月朔日 (1861.12.31)	29日	12月30日 (1862.1.29)	文久改元：2月19日 (1861.3.29)	
文久 2年	壬戌	384	⑧	(1862.1.30)	2・5・7・⑧・10・12	11月11日 (1862.12.31)	48日	12月29日 (1863.2.17)		
文久 3年	癸亥	355		(1863.2.18)	1・4・6・9・11	11月21日 (1863.12.31)	38日	12月30日 (1864.2.7)		
元治 元年	甲子	354		(1864.2.8)	1・2・4・6・10・12	12月 3日 (1864.12.31)	26日	12月29日 (1865.1.26)	元治改元：2月20日 (1864.3.27)	
慶応 2年	乙丑	384	⑤	(1865.1.27)	2・3・5・6・9・12	11月14日 (1865.12.31)	45日	12月29日 (1866.2.14)	慶応改元：4月7日 (1865.5.1)	
慶応 2年	丙寅	355		(1866.2.15)	2・4・5・6・9	11月25日 (1866.12.31)	35日	12月30日 (1867.2.4)		
慶応 3年	丁卯	354		(1867.2.5)	1・3・5・6・7・9	12月 6日 (1867.12.31)	24日	12月30日 (1868.1.24)		
明治 元年	戊辰	383	④	(1868.1.25)	1・4・④・6・7・9・12	11月18日 (1868.12.31)	41日	12月29日 (1869.2.10)	明治改元：9月8日 (1868.10.23)	
明治 2年	己巳	355		(1869.2.11)	4・5・7・8・10	11月29日 (1869.12.31)	31日	12月30日 (1870.1.31)		
明治 3年	庚午	383	⑩	(1870.2.1)	1・4・6・8・10・⑩・12	11月10日 (1870.12.31)	49日	12月29日 (1871.2.18)		
明治 4年	辛未	355		(1871.2.19)	3・6・8・10・11	11月20日 (1871.12.31)	39日	12月30日 (1872.2.8)		
明治 5年	壬申	355		(1872.2.9)	1・3・6・9・11	12月 2日 (1872.12.31)	—	—		

* 「該年次の西暦最終日」は、該和暦が大部分含まれる西暦の最終日 (12月31日) の和暦の月日である。

・本表は野島寿三郎/編『日本暦西洋暦対照表』昭和62年1月 日外アソシエーツ株式会社/刊、加唐興三郎/編『日本陰陽暦日対照表 (下巻) 1101～1872 (康和3年～明治5年)』平成5年9月 株式会社ニッソー/刊、内田正男編著『日本暦日原典 (第四版)』平成6年3月 雄山閣出版/刊 に拠り作成した。

・天正10年9月18日 (1582.10.4) 以前はユリウス暦が用いられていたが、本表ではグレゴリオ暦に換算した。

・○内の数字は閏月を示す。

・西暦が翌年になる期間の平均日数は、36.27日である。

日（天正10年9月19日）にヨーロッパでユリウス暦からグレゴリオ暦に改められており、ほとんどの期間がグレゴリオ暦の施行下にあったことによる。

1年の日数

表中の日数は、それぞれの年次の日数である。平年は354日が122回、355日が67回あり、例外的に延享元年（1744.2.14～1745.1.31）の353日が1回ある。閏年は383日が10回、384日が98回のほか385日が寛永11年（1634.1.29～1635.2.17）と正徳3年（1713.1.26～1714.2.14）の2回ある。平年の合計は190、閏年合計は110で、平年と閏年の比率は $190 \div 110 \div 1.727$ であり、メトン法の平年と閏年の比率 $(19-7) \div 7 = 12 \div 7 \div 1.714$ とほぼ等しい。

閏月

この欄に記載のある年次は閏年で、○内の数字は、前述の方法で19年に7回設けられた閏月の名称の略符号である。これによると300年の間に、閏正月（この欄では①と表記）は10回、閏2月（この欄では②と表記、以下同じ）は9回、閏3月は9回、閏4月は13回、閏5月は11回、閏6月は8回、閏7月は10回、閏8月は12回、閏9月は6回、閏10月は8回、閏11月は9回、閏12月は5回となっており、閏月が何月と何月の間に入るかの規則性は見い出せない。

正月元日の西暦の日付

和暦の該年次の最初の日がグレゴリオ暦の何月何日に当たるかを示したものである。この西暦の日付の前日までが、「はじめに」で例示した機械的に和暦年次の（ ）内に西暦の年次を記載した時の齟齬部分に相当する。

小の月の配置

各年次の正月（表では1月と表示）から12月あるいは閏12月（表では⑫と表示）のうち29日の小の月を抽出したものである。この欄の月の配列と閏月を勘案すれば、その年の大小の月の配列が判る。前述のように小の月と大の月の配置は「朔」の現象が生じた時刻に左右されるので、規則性はないと考えられる。

小の月と大の月の組合せは300年のうちに214種ある。このうち、複数年に出現した組合せは、2回が30種、3回が18種、4回が5種、5回が3種、7回が2種で、合計58種である。

ちなみに、7箇年¹⁷⁾に出現した小の月の組合せは、1・3・4・6・8・12月の〔慶長5年（1600.2.15～1601.2.2）・寛文2年（1662.2.19～1663.2.7）・元禄元年（1688.2.2～1689.1.20）・寛延3年（1750.2.7～1751.1.26）・文化9年（1812.2.13～1813.1.31）・天保10年（1839.2.14～1840.2.2）・嘉永元年（1848.2.5～1849.1.23）〕1・3・6・8・10・12月の〔慶長2年（1597.2.17～1598.2.5）・万治2年（1659.2.22～1660.2.10）・貞享2年（1685.2.4～1686.1.23）・延享4年（1747.2.10～1748.1.29）・天明3年（1783.2.2～1784.1.21）・天保7年（1836.2.17～1837.2.4）・弘化2年（1845.2.7～1846.1.26）〕である。

また、現行暦の小の月の配置、すなわち2・4・6・9・11月〈にしむくさむらい=二・四・六・九・十一(土)、西向く侍〉と同じ組み合わせは、天正17年(1589.2.15～1590.2.4)・慶長3年(1598.2.6～1599.1.26)・慶安4年(1651.2.20～1652.2.9)・享和元年(1801.2.13～1802.2.2)・天保8年(1837.2.5～1838.1.25)の5箇年ある。

経日計算

古文書に万延元年3月晦日の記事の直後に、「同年四月朔日」の日付が記載されていたら、多くの人は、翌日のことと判断するだろう。ところが、「便覧」を見ると万延元年は閏年で、三月と四月の間に大の月の閏三月がはいるので、翌日ではなく、実際には31日後のこととなる。翌日と31日後とでは、その古文書の解釈が逆転する可能性がある。

4. ズレの検証

和暦と西暦のズレ

第2表中の「西暦が翌年になる期間」は、「はじめに」で触れた「齟齬」の部分の具体的情報である。「該年次の西暦最終日」は、機械的に和暦のあとの()に記載した西暦の最終日(当然のことながら日付は12月31日となる)を和暦に変換した日付で、翌日がここでいう「ズレ」の開始日である。「該年次の最終日の西暦」は、和暦該年次の最終日(12月あるいは閏12月の、小の月であれば29日、大の月であれば30日)を西暦に変換した日付で、「ズレ」の最終日である。

「日数」は、開始日から最終日までの期間である。

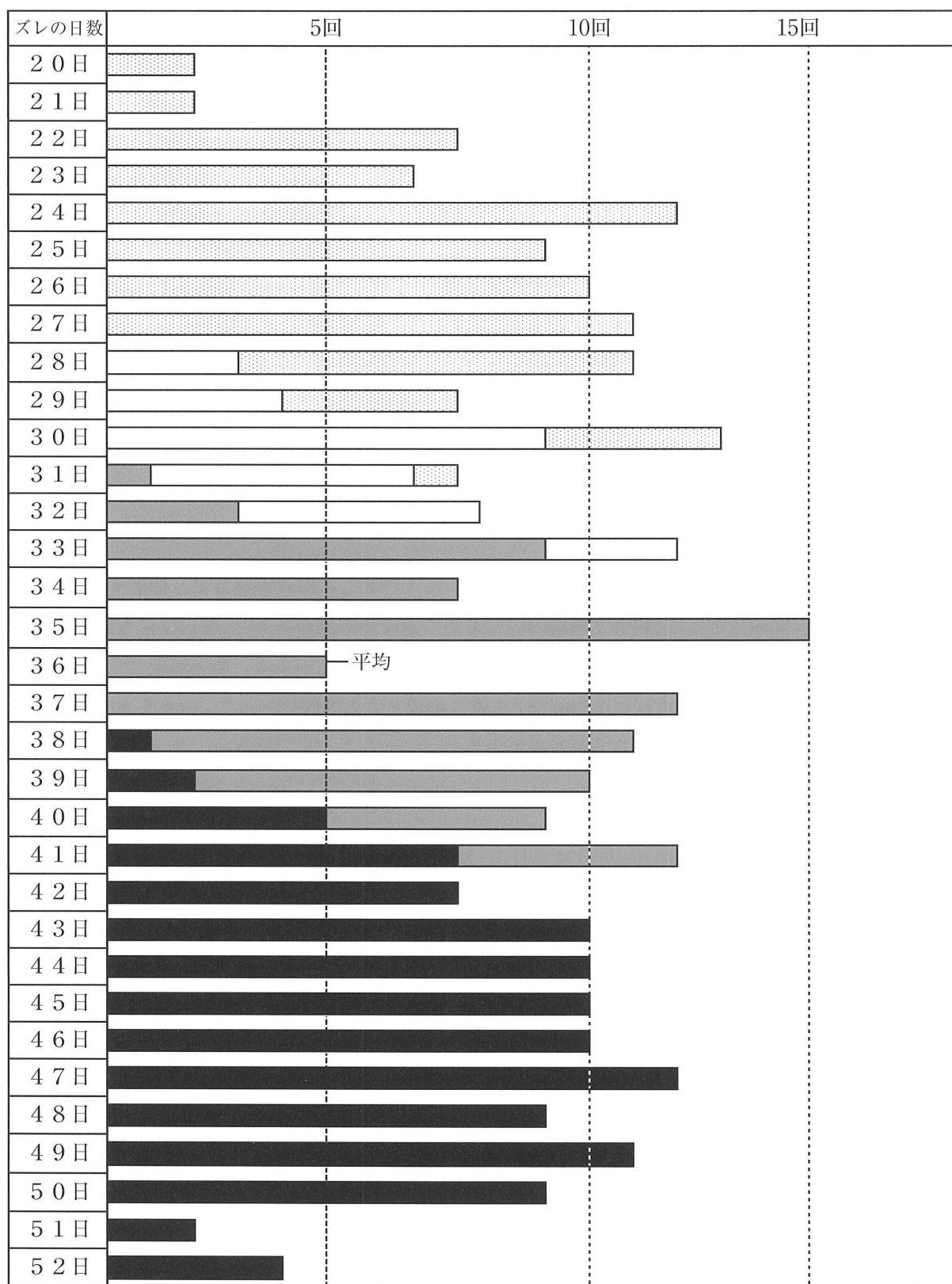
この「ズレ」は、前述のように西暦では年初を冬至のあとに設定したのに対し、旧暦は立春附近に設定したことに始まり、太陽年と朔望年の日数の差と閏月の挿入により生じたものである。

ズレの日数の最小は20日で元禄元年(1688.2.2～1689.1.20)と嘉永4年(1851.2.1～1852.1.20)の二回ある。最大は52日で慶長6年(1601.2.3～1602.2.21)と元和6年(1620.2.4～1621.2.21)と寛永16年(1639.2.3～1640.2.21)と万治元年(1658.2.3～1659.2.21)の4回ある。

ズレの20日から52日までのそれぞれの日数と、該年次と閏年との関連を図示したのが第1図である。この図から閏年のズレが一番大きく、ついで閏年の翌年、閏年と閏年の間、翌年が閏年の順で小さくなっていることがわかる。つまり、冬至後のグレゴリオ暦の年初と立春付近の旧暦の年初という基本形が、両者の平年の日数の差の分づつ年毎に接近し、ほぼひと月蓄積した段階で閏月を挿入して、基本形に戻しているのである。

両者のズレの平均は36.27日である。これは太陽暦の一年の9.9%に相当し、数学上の許容誤差の範囲を超えている。つまり、「元号年(西暦)月・日」のような記載は、平均9.9%誤っているのである。なお、閏年のズレの平均は45.57日で、12.5%となり、誤差の確率がさらに高くなっている。

【第1図】 和暦と西暦のズレ（西暦に和暦を重ねた際、該西暦年次に含まれない和暦の日数と、その回数）



閏年
 閏年の翌年
 翌年が閏年
 前後が閏年

季節のズレ

第1図の縦軸に注目すると、20日から52日と32日の幅がある。つまり、旧暦の元日をグレゴリオ暦に変換すると1月21日から2月22日までの、時間にして一箇月余の可能性があるということである。一箇月は春・夏・秋・冬のひとつの季節の3分の1で、決して無視できない。ということは、旧暦の日付で書かれた古文書の内容が季節に関わる場合、現在のどの季節かを比定することは困難であるといわざるを得ない。前述の赤穂浪士の討入りの日を、現行暦の12月15日とすると、江戸時代が現在より寒かったとしても、積雪があったとは考えにくい¹⁸⁾が、グレゴリオ暦の1月31日とすると納得がいく。

旧暦で長年生活していれば、旧暦の日付で季節は判断できないことは常識であったと考えられる。当時の人々の季節観は、日付ではなく立春から春、立夏から夏、立秋から秋、立冬から冬となっていた。前述のように立春等は二十四節気に含まれ、二十四節気はあくまでも太陽暦起源である。即ち太陽暦起源の用語が旧暦の「こよみ」の当該日に注として記載されていた。つまり、旧暦で暮らしていた人々は、日付を太陰太陽暦に、季節を太陽暦によって把握していたことになる。

5. 和暦の西暦表示についての提言

本稿では、わが国の歴史の年代表示に、西暦の年次のみを付記した際の不具合と、旧暦そのものの不合理性を検証した。問題点として、和暦と西暦の間に看過できない齟齬があり、旧暦自体にも齟齬があり、旧暦の日次の記載だけでは、新暦下に生きる現代人には理解し難い面が多く、歴史解釈に重大な過誤を生じかねないことを指摘した。これらの事柄は、正確さを旨とする学問にとって、由々しき問題である。

以下これらの問題を一挙の解決する方法を提示する。

和暦を日次まで西暦に変換

これまで指摘した諸問題は、意外にも簡単な方法ですべて解決する。その方法は、本稿で採用している「和暦を日次まで西暦に変換する」ことである。例にあげた赤穂浪士の討入りは「元禄15年（1702）12月15日未明」という表示を「元禄15年12月15日（1703.1.31）未明」とすればよいのである。また、経日計算では「万延元年3月晦〈30〉日（1860.4.20）」と「万延元年4月朔日（1860.5.21）」とすれば、間が31日あることは一目瞭然である。なお、日次が未詳の場合は「万延元年4月（1860.5.21～6.18）」、月日が未詳の場合は「万延元年（1860.1.23～1861.2.9）」とするのである。複数年にまたがる場合は、「寛永6～8年（1629.1.25～1632.2.19）」とする。改元の扱いは始期を改元の年の元日とし、終期を次の改元の前年の大晦日とするのが一般的で、「寛永時代（1624.2.19～1644.2.7）」と表記する。一般的ではないが始期を改元の日、終期を次の改元実施日の前日とするのであれば「寛永元年2月30日（1624.4.17）～寛永21年12月15日（1645.1.12）」となる。

和暦の西暦変換

正確性を確保するために日次まで変換しなければならないが、その作業をするのに必要な資料として

つぎのような文献がある。

- ・内務省地理局編纂『三正綜覧』明治13年刊（『補正新訂三正綜覧』昭和48年・藝林舎刊）
- ・内田正男編著『日本暦日原典』昭和50年・雄山閣出版刊（『日本暦日原典〔第四版〕』平成6年・雄山閣出版刊）
- ・野島寿三郎編『日本暦西洋暦月日対照表』（1987・日外アソシエーツ刊）
- ・釣 洋一著『和洋暦換算事典』（1992・新人物往来社刊）
- ・加唐興三郎編『日本陰陽暦日対照表（下巻）』（1993・ニッポー刊）

さらに、より便利な方法として早川由紀夫（群馬大学教育学部）・小山真人（静岡大学教育学部）・前嶋美紀（まえちゃんねっと）氏開発の暦変換ソフト『換暦』（maechan.net/kanreki/）がある。このソフトを使用すれば、和暦の年月日を入力すれば、即座に西暦の年月日に変換される（逆も可）。

おわりに

「元禄15年（1702）12月15日」という表示は、長年のわたって何の疑いもなく使われてきたが、細かく検証すると齟齬があり、さらに旧暦そのものを検証すると、現行暦に馴れ親しんでいる我々にとって、想定外の不規則性を持っていて理解し難い面が多々ある。旧暦の実態を把握するのは甚だ困難であるが、幾何の問題を解く時に、補助線を引くと解答しやすくなるように、日次まで西暦に変換するという、ひと手間加えるだけで従来の西暦表示の齟齬が解消し、旧暦の不規則性も克服できるのである。しかもコンピュータの導入により、変換の時間と手間が軽減できるので、日本史の研究者には是非とも実行の移して戴きたい。また、所謂「グローバル化」により、世界史の中の日本史、日本史と世界との関係を知る上で同じ土俵に立つ場合には、和暦表示はより普遍性の高い西暦に、中途半端な形でなく、日次までに変換する必要がある。また、諸外国の人々にわが国の歴史を理解していただく上でも（とくに、歴史博物館のような施設では）相互比較が容易にできるように、和暦の日次を西暦の日次まで変換する必要がある。だからといって、和暦表示を廃止して、すべてを西暦表示にしろという訳ではない。和暦は、単なる限定地域内の年代表示の方法ではなく、わが国の伝統文化であり、後世に伝えるべき文化遺産である。これをわかりやすく理解するために、西暦に日次まで転換した情報を付加することを提言するのである。

【註】

- 1) もちろん元号のみ、元号と年次のみ、あるいは月（が）や日（ひ）を欠くものも含む。
- 2) ユリウス暦は、ローマ帝国の終身独裁官ガイウス＝ユリウス＝カエサル（シーザー、BC102?～BC44.3.15）によってBC45年1月1日から、太陰太陽暦のローマ暦を廃止し、実施された。
- 3) グレゴリオ改暦は、ユリウス暦1582年10月4日（天正10年9月18日）の翌日をグレゴリオ暦1582年10月15日（天正10年9月19日）にすることによって完了した。従って西暦の1582年10月5日～14日は存在しないので注意を要する。ユリウス暦とグレゴリオ暦の違いについては、本文「1 太陽暦と太陰暦と太陰太陽暦」の章の「太陽暦」の項で略述する。
- 4) 傍線は筆者。ほとんどの場合「該年次が多く含まれる西暦の年次」という認識なしで、機械的に西暦の年次を

記していると見受けられる。

- 5) 当館は、「1702年(元禄15)12月15日未明」と記すようになっている。これを素直に読むと「1702年12月15日未明」に討入りがあったことになる。ちなみに、この日を和暦に換算すると、元禄15年10月27日となる。
- 6) 貞享元年10月29日(1684.12.5)、江戸幕府は、暦学・天文学者渋川春海(寛永16年～正徳5年10月6日、1639.2.3～1640.2.21～1715.11.1)の建言により、貞観4年(862.2.3～863.1.22、ただしユリウス暦)以来使われてきた宣明暦を停止し、貞享暦を採用した。
- 7) 太陽暦の1年は365日(平年)で、 $365 \div 30 = 12 \cdots 5$ で、大の月を5回設ければよいのであるが、ユリウス暦の大小の月の配分は、当初大の月をほぼ規則的に、年初から1・3・5・7月、年末に向けて10・12月の6回設けた。6回としたのは、ローマ暦では年末の月で、閏日の調節に使われていた本来小の月である2月(ユリウス暦)を1日減じて平年は29日、閏年は30日としたからである。ところが、ユリウス=カエサルの後継者でアウグストゥスの称号を与えられ、ユリウス暦の改良と普及に努めたオクタウィアヌス(BC63～AD14.8.19)は自分の誕生月である8月が小の月では誇りに疵がつくとして、調節月の2月の最終日を小の月の8月末日に移し、8月を大の月にしたのである。この措置によって現行暦の不規則な大小の月の配分になったのである。ちなみに、8月の英語名Augustはオクタウィアヌスの称号Augustusに由来する。
- 8) 閏日の削減は、本来閏年である西暦の100の倍数年のうち、400で割切れない年の閏日を省くことによって実現している。
- 9) 太陰太陽暦の基本的構造はこの通りであるが、実際の太陽太陰暦の造暦方法は後述のように複雑である。
- 10) ギリシアの科学者メトンがBC433年に提案したので、メトン法と呼ばれている。中国でも、ほぼ同時期に「章法」という19年7閏法が知られるようになり、太陰太陽暦の造暦に反映され、のちにわが国へも伝えられた。
- 11) ほぼとしたのは、235朔望月と19太陽年の差0.0866日(6939.6884－6939.6018)、時間にして2時間余(24時間×0.0866＝2.0784時間)あるからである。
- 12) 二十四節気の節目は、必ずしも一定でない太陽の運行の観測結果に基づくので、その間隔は等分ではない。二十四節気は、今日でも季節や気候の移ろいの用語として天気予報などでよく用いられている。その用語が現在の我々の季節や気候の感覚より少し先走っているのも、旧暦起源のように思われがちであるが、本文で指摘したように、二十四節気は太陽暦起源である。季節感の違和感は、たとえば立春を例にとると、現代人は「花が咲き、まさに春が訪れたとを感じる日」と捉えているのに対し、われわれの祖先は、「春まだきだが、一年中で一番寒い時期(二十四節気の「大寒」)を過ぎ、もうすぐ春」と心うきうきして捉えていたのとの差と考えられる。
- 13) ちなみに、立春の西暦1734年2月4日が旧暦の正月元日であった享保19年を基点とし、翌年以降の正月朔日を追跡すると、①享保20年(閏年)が1735.1.24 ②元文元年が1736.2.12 ③同2年(閏年)が1737.1.31 ④同3年が1738.2.19 ⑤同4年が1739.2.8 ⑥同5年(閏年)が1740.1.29 ⑦寛保元年が1741.2.16 ⑧同2年が1742.2.5 ⑨同3年(閏年)が1743.1.26 ⑩延享元年が1744.2.14 ⑪同2年(閏年)が1745.2.1 ⑫同3年が1746.2.20 ⑬同4年が1747.2.10 ⑭寛延元年(閏年)が1748.1.30 ⑮同2年が1749.2.17 ⑯同3年が1750.2.7 ⑰宝暦元年(閏年)が1751.1.27 ⑱同2年が1752.2.15 ⑲同3年が1753.2.3 となり、ほぼ立春に戻る。また、当然のことながらこの間に閏年が7回出現している。
- 14) (註13)で見るとように基点から最初の閏年出現は3年目ではなく翌年である。これは、1節月と1朔望月の差0.906261日(＝30.43685－29.530589日)の蓄積が、中気と節気との平均間隔15.21843日を上回り、中気のない朔望月が16～17箇月後($15.218425 \div 0.906261 \approx 16.79254$)、つまり翌年に出現するからである。この後は、差が蓄積して1箇月になった段階で閏月を挿入することになる。また、三つの数字の平均つまり真ん中から出発するので、翌年には最大値に達するとも考えられる。
- 15) わが国の太陰太陽暦は、律令制度下では中務省の管轄のもと、暦博士1人がいて暦を造ることが規定されていた。暦を造る暦道は、天文道とともに世襲化し、賀茂家が独占するようになった。賀茂家7代の保憲は、陰陽博士、天文博士などを歴任したあと、暦道を子の光榮に伝え、天文道を弟子の安倍清明に譲った。後に安倍家は土御門、賀茂家は幸徳井(かでい)を名乗るようになった。幸徳井家は江戸時代末まで造暦に携わったが、江戸幕府主導で行われた貞享の改暦(貞享元年10月29日(1684.12.5)施行)以後、実質的な造暦は幕府の天文方が担当し、幸徳井家は暦注の部分のみ受持つようになった。また、現在も太陰太陽暦の「こよみ」が頒布され、好評を博しているが、この「こよみ」は、江戸時代最後に改暦された「天保暦」をもとに、詳密な天体観測情報とコンピュータを駆使するので、翌年以降のこよみも製作可能になった。
- 16) 第2表の標題を「便覧」としたのは、和暦を西暦に変換する際の基礎的情報を集約したことによる。なお、太

陰太陽暦が使われていた時代、わが国では、年初の月は「正月」と呼ばれていた。本表では便宜的に、本来「正月」・「閏正月」と記すべきところを「1月」・「閏1月」と記し、「1」「①」と略記した。

- 17) 同じ大小月の組合せの出現間隔を見ると、62年が39組、150年が12組、9年が11組、212年が9組、53年が5組、36年が4組、89・89・98年が3組、26・27・87・160年が2組、52・203・248年が1組と、ある程度の傾向を見出すことができる。
- 18) 赤穂浪士の大願成就を記念する「義士祭」が各地で開催されるが、その日付は現行暦の12月14日が多い。これは、明治5年11月9日（1872.12.9）の「改暦の詔書」（太政官布告第337号）中の「一、諸祭典等舊暦月日ヲ新暦月日ニ相當シ施行可致事」によるものか。